

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

米国は年間約8700万トンを超える量の生乳を生産する世界最大の酪農国である。しかしながら、国内に巨大な消費市場を抱えていることなどから、国際乳製品市場における米国の地位は比較的低いものとなっている。

① 主要な政策

酪農の主な制度には、連邦生乳マーケティング・オーダー制度（FMMO）と乳製品価格支持制度（DPPSP）がある。FMMOは、オーダー（生乳取引地域）内で取り引きされる生乳について、それを飲用向けと加工向け3分類の計4分類の用途別に分けてそれぞれの最低取引価格を設定するとともに、生乳取扱業者に対して、生産者へのプール乳価（用途別乳価を加重平均した乳価）での支払いを義務付けることにより、生産者に対しては安定的な収入を確保すること、また、消費者に対しては合理的な価格で牛乳・乳製品を供給することを目的としたものである。2000年1月からは紆余（うよ）曲折を経て、①オーダー数の再編統合（当初の31から段階的に縮小され、2004年4月からは10地域となった。）、②生乳の用途区分の再分類（3区分から4区分へ）、③最低取引価格の設定に用いられる価格について、これまでの基礎公式価格（BFP）に代えて、多成分価格形成システムに基づく新基礎価格の導入一などの変更が加えられた。

一方、DPPSPは、米国農務省（USDA）の一機関である商品金融公社（CCC）が、支持価格でチーズ、バターおよび脱脂粉乳を買い上げることにより、加工原料乳の価格を間接的に支持する制度である。

この制度は2008年農業法において、これまでの加工原料乳価格支持制度の仕組みを実質的に維持した上で、名称を「乳製品価格支持制度」に改め、加工原料乳の支持価格を廃止して主要乳製品の支持価格を法律で定める制度に変更された。

② 生乳の生産動向

ア 酪農経営体数

酪農経営体数は、小規模層を中心に一貫して減少傾向で推移しており、2010年には前年比3.8%減の約6万3000戸となった。

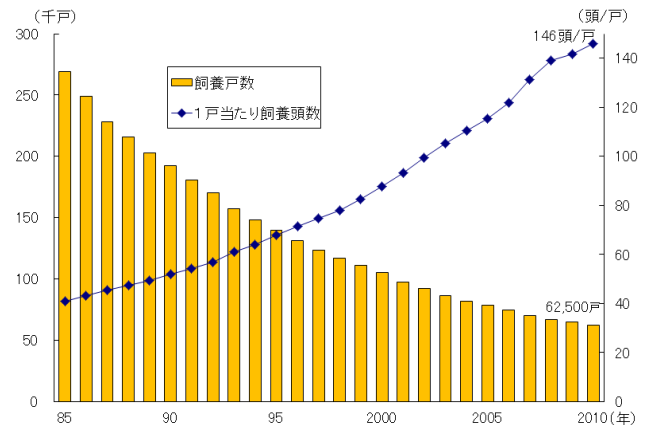
表1 酪農経営体数、飼養頭数の推移

(単位: 戸、千頭、頭/戸)

区分/年	2006	2007	2008	2009	2010
酪農経営体数	74,980	69,995	67,000	65,000	62,500
経産牛頭数	9,137	9,189	9,315	9,203	9,117
1戸当たり飼養頭数	122	131	139	142	146

資料:USDA「Farms, Land in Farms, and Livestock Operations」、
「Agricultural Statistics」、
「Milk Production, Disposition and Income」
注1:酪農経営体数は、2007年以降と2006年以前で集計方法が異なる
注2:経産牛頭数は、年間平均の飼養頭数
注3:1戸当たり飼養頭数は、経産牛頭数を経営体数で除したもの

図3 酪農経営体数および飼養規模の推移



資料:USDA「Farms, Land in Farms, and Livestock Operations」、
「Milk Production, Disposition and Income」

イ 飼養頭数と生産量

経産牛飼養頭数は、80年代中頃から一貫して減少傾向で推移してきたが、99年に下げ止まった後は、小幅な増減を繰り返している。2010年の経産牛飼養頭数は、前年比0.9%減の912万頭となった。

また、2010年の生乳生産量は、前年比1.9%増の8747万トンとなった。

表2 生乳・乳製品の生産量

(単位:千トン)

区分/年	2006	2007	2008	2009	2010
生乳	82,455	84,211	86,174	85,880	87,474
バター	657	695	746	713	709
脱脂粉乳	564	589	689	686	709
チーズ	4,320	4,435	4,496	4,570	4,737

資料: USDA「Milk Production, Disposition and Income」、「Dairy Products」

注: チーズはカッテージチーズを除く

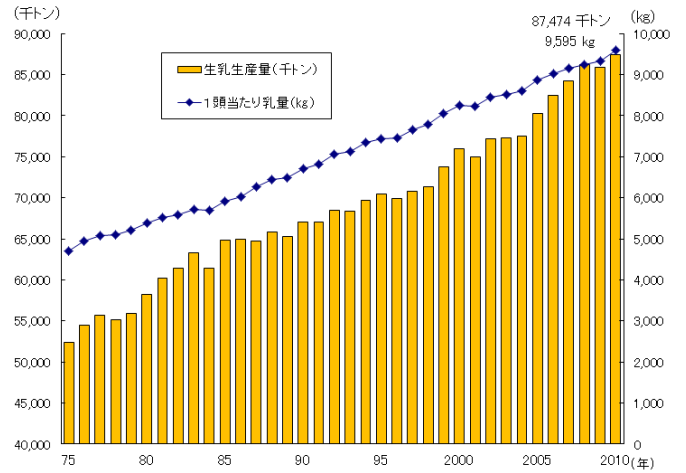
ウ 経産牛1頭当たり乳量

経産牛1頭当たり乳量は、増加傾向で推移しており、2010年では、前年比2.8%増の9,595キログラムとなった。

エ 地域別生産動向

生乳は、すべての州において生産されているが、生産量の5割強は上位5州（カリフォルニア、ウィスコンシン、アイダホ、ニューヨーク、ペンシルバニア）によって占められており、上位10州（6位以下：ミネソタ、テキサス、ミシガン、ニューメキシコ、ワシントン）では全体の7割強を占めている。

図4 生乳生産量と1頭当たり乳量の推移



資料: USDA「Milk Production, Disposition and Income」

さらに安価な労働力も確保しやすいことなどから、大規模化が図りやすいという利点があり、当該地域を代表するカリフォルニア州は、93年にウィスコンシン州を抜いて国内最大の生乳生産州になって以降、生産を拡大している。しかしながら、カリフォルニア州では、2008年終盤の国際乳製品価格の暴落を受けて乳価低迷に苦しんだ同州の生産者が、2009年に大規模な乳牛のとう汰を実施したことから、2009年の生産量は1792万トン（前年比4.1%減）となったが、2010年は前年比2.2%増の1831万トンまで回復した。また、第2位のウィスコンシン州は、2010年に同3.2%増の1181万トンとなった。



酪農家での乳牛飼養風景

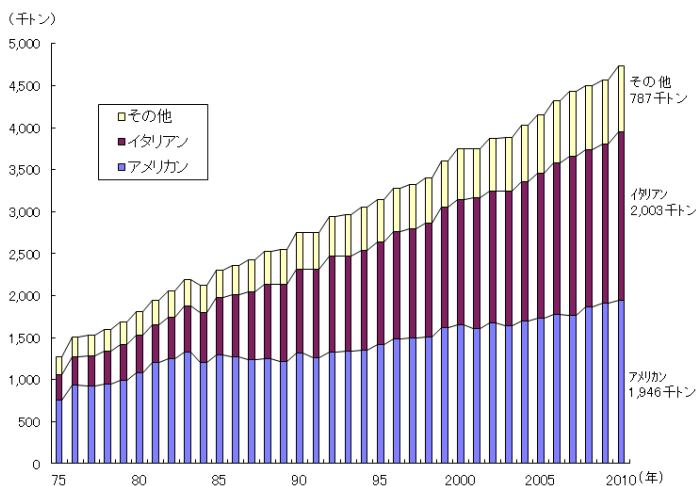
③ 牛乳・乳製品の需給動向

ア 生産動向

2010年のチーズの生産量（カッテージチーズを除く。）は、前年比3.7%増の473万7000トンとなった。このうち、チェダーチーズを中心とするアメリカンタイプの生産量は同2.1%増(194万6000トン)となり、モッツアレラチーズなどイタリアンタイプの生産量は同5.6%増(200万3000トン)となった。イタリアンタイプは、宅配ピザやファストフードでの需要の増加により過去20年以上増加基調で推移している。同年のチーズ生産量では、アメリカンタイプが41.1%、イタリアンタイプが42.3%のシェアを占めた。

また、脱脂粉乳の生産量は、前年比3.4%増の70万9000トン、バターの生産量については、前年比0.6%減の70万9000トンとなった。

図5 チーズ生産量の推移



資料：USDA「Dairy Products」

イ 消費動向

1人当たりの年間飲用乳・クリーム消費量（製品ベース、以下同じ）は、ほかの飲料との競合などにより、近年、おおむね減少傾向で推移しているものの、2010年は前年比0.4%増の93.6キログラムとなった。なお、飲用乳の消費は、全脂牛乳から低脂肪牛乳、脱脂牛乳へと低脂肪タイプへの移行が進んでいる。

一方、1人当たりの年間チーズ消費量（カッテージチーズを除く）は、近年、増加傾向で推移しているものの、2010年は前年比0.5%減の14.9キログラムとなった。また、1人当たりの年間バター消費量は、前年比2.2%減の2.2キログラムとなった。

④ 牛乳・乳製品の価格動向

ア 生乳価格

2010年の生乳価格は、国内外の乳製品需要が堅調であったことから、大きく落ち込んだ2009年から回復し、加工原料乳の平均価格（グレードB規格生乳の農家販売価格）は前年比21.0%高の100ポンド当たり14.56ドル、生乳平均販売価格は、前年比26.5%高の同16.35ドルとなった。

表3 生乳の生産者販売価格

(単位:ドル/100ポンド)

区分/年	2006	2007	2008	2009	2010
加工原料乳価格	12.19	18.31	17.91	12.03	14.56
生乳平均価格	12.96	19.21	18.45	12.93	16.35

資料：USDA「Agricultural Price」

注：加工原料乳価格は、グレードBの加工規格の生乳価格

イ 乳製品の卸売価格

2010年の乳製品の卸売価格は、世界金融危機に伴う国際価格の低下を反映して大きく下落した2009年水

準から回復し、脱脂粉乳の年平均価格は前年比 25.7% 高の 1 ポンド当たり 119.7 セント、チェダーチーズは同 19.5% 高の 149.6 セント、バターは同 39.0% 高の 172.8 セントとなった。

表 4 乳製品の卸売価格の推移

(単位:セント/ポンド)

区分/年	2006	2007	2008	2009	2010
バター	123.6	136.8	146.3	124.3	172.8
脱脂粉乳	90.4	177.6	124.6	95.2	119.7
チェダーチーズ	121.9	174.1	183.6	125.2	149.6

資料:USDA「Dairy Market News」

注1:バターはシカゴ・マーカントイル取引所の現物価格(グレード AA)

注2:チーズはシカゴ・マーカントイル取引所の現物価格



小売店での牛乳等の陳列風景

⑤ 乳製品の政府買い上げ

2007 年は堅調な輸出需要を反映して米国内の乳製品価格が堅調に推移したことから、商品金融公社 (CCC) による余剰乳製品の買い上げは実施されなかったが、2008 年は脱脂粉乳、2009 年は脱脂粉乳、バターおよびチーズ、2010 年はバターおよびチーズで実施された。

表 5 乳製品の政府買い上げ数量の推移

(単位:千トン)

区分/年	2006	2007	2008	2009	2010
バター	0	0	0	12.9	2.3
チーズ	0	0	0	1.5	0.1
脱脂粉乳	28.3	0	50.2	104.2	0
乳脂肪分ベース (生乳換算量)	6.4	0	10.9	318.9	50.8
無脂乳固形分ベース (生乳換算量)	330.2	0	584.6	1230.6	1.4

資料:USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook:Tables」

(2) 肉牛・牛肉産業

米国は、世界の牛肉生産量の約 2 割を占める最大の生産国であると同時に、世界最大の牛肉輸入国でもある。国内的にも、肉牛産業は農産物販売額に占める割合が最大となっており、米国農業の中でも最も重要な部門の一つとなっている。

肉用子牛生産は、家族経営による生産・管理が行われる一方、育成された肥育素牛は、大規模なフィードロットで効率的な穀物肥育が行われている。また、肉牛の流通面では、大手パッカーによる寡占化が顕著となっている。

① 肉牛の生産動向

ア 肉用牛繁殖経営体数

肉用牛繁殖経営体数 (年間に 1 頭以上飼養) は、近年減少傾向で推移しており、2010 年も前年比 1.2% 減の 74 万 2000 戸となった。

表6 肉用牛繁殖経営体数、飼養頭数の推移

(単位:戸、千頭、頭/戸)

区分/年	2006	2007	2008	2009	2010
肉用牛繁殖経営体数	762,880	766,350	757,000	751,000	742,000
繁殖雌牛頭数	32,994	32,891	32,435	31,712	31,371
1戸当たり飼養頭数	43	43	43	42	42

資料:USDA「Cattle」「Farms, Land in Farms, and Livestock Operations」

注1:肉用牛繁殖経営体数は、2007年以降と2006年以前では集計方法が異なる

注2:繁殖雌牛頭数は、各年1月1日現在のもの

注3:1戸当たり飼養頭数は、繁殖雌牛頭数を経営体数で除したもの

イ 飼養頭数

2011年1月1日現在の牛総飼養頭数は、前年比1.3%減の9268万頭となった。米国のキャトルサイクルは、96年をピークに8年連続で減少した後、2005年にはいったん上昇局面に転じた。しかし、2006年のテキサス州を中心とした中南部における干ばつ、また、2006年後半以降の飼料コスト高の影響などにより、肉用牛繁殖経営の収益性が悪化し、肉用繁殖雌牛の保留が抑制された結果、牛の総飼養頭数は減少傾向で推移

している。

2011年1月1日現在の飼養頭数の内訳を見ると、肉用繁殖雌牛は前年比1.7%減の3085万頭、また、500ポンド(約227キログラム)以上の肉用繁殖後継牛は、前年比5.7%減の514万頭となった。

さらに、2010年における子牛生産頭数(乳用種を含む)は、肉用繁殖雌牛の飼養頭数が伸び悩んだことにより、前年比0.7%減の3568万頭となった。

フィードロットの風景



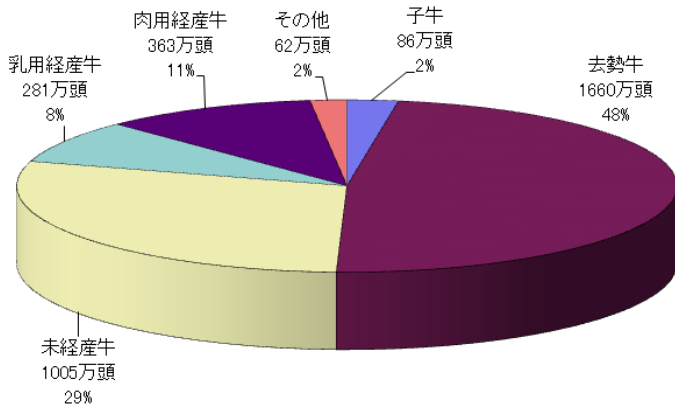
② 牛肉の需給動向

ア 生産動向

2010年の成牛と畜頭数(コマーシャルベース)は、前年比2.7%増の3425万頭となった。

種類別(連邦政府検査ベース)では、去勢牛が前年比1.7%増、未經産牛は同3.1%増、肉用経産牛は同9.2%増となる一方、乳牛経産牛は前年比0.3%減とほぼ前年並みとなった。なお、子牛が最も減少率が大きく、前年比7.1%減とかなりの程度減少した。

図6 種類別と畜頭数(2010年)



資料:USDA「Livestock Slaughter」

一方、2010年の成牛のと畜時平均生体重(連邦政府検査ベース)は、肥育牛価格が高くフィードロットからの早期出荷が行われたことにより前年比6.4キログラム減の581.5キログラムとなった。また、平均枝肉重量(連邦政府検査ベース)も、前年比5.0キログラム減の350.6キログラムと前年を下回った。

2010年の牛肉生産量(枝肉重量ベース)は、平均枝肉重量が前年に比べ減少したものの、と畜頭数が増加したことから前年比1.3%増の1198万トンとなった。

表7 牛肉需給(枝肉換算)の推移

(単位:千トン)

区分/年	2006	2007	2008	2009	2010
生産量	11,909	12,031	12,095	11,824	11,980
輸入量	1,399	1,384	1,151	1,191	1,042
輸出量	519	650	905	878	1,043
在庫量	286	286	291	256	265
消費量	12,763	12,764	12,334	12,173	11,970
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	29.9	29.6	28.3	27.7	27.0

資料:USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook:Table」

注:1人当たり消費量は小売重量ベース

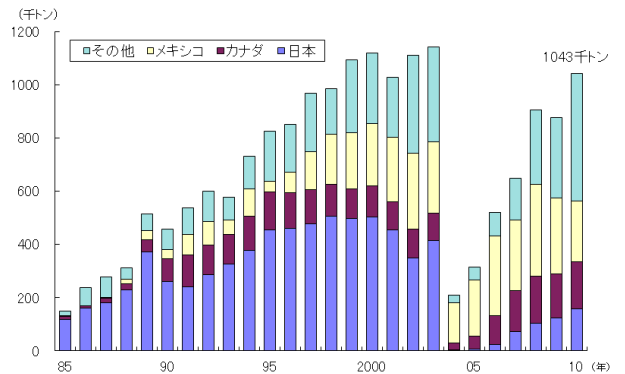
イ 輸出入動向

2010年の牛肉輸入量(枝肉重量ベース)は、米国内の生産量が増加したことなどから、前年比12.5%減の104万2000トンとなった。国別に見ると、最大の輸入先のカナダは同6.0%増の39万1000トンとなったものの、豪州は豪ドル高や豪州における生産量が前年を下回ったことなどにより、同28.5%減の25万7000トンとなった。

一方、同年の生体牛の輸入は、メキシコは前年比29.8%増の122万1000頭、カナダも同0.2%増の106万3000頭となり、全体では同14.1%増の228万4000頭とかなり大きく増加した。

2003年12月、米国内で初めてBSEが発生した影響を受け、2004年に大幅に減少した牛肉輸出量は2005年以降順調に回復し、2009年は前年をやや下回ったものの、2010年は米ドル安やアジア・中東向け輸出に後押しされ、前年比18.9%増の104万3000トンと大幅に増加した。国別では、最大の輸出国であるメキシコ向けは同20.4%減の22万7000トンと大幅に減少したが、カナダ向けは同7.5%増の17万7000トンとなった。また、2003年まで最大の輸出相手国であった日本向けは、前年比27.9%増の15万9000トンと大幅に増加し、4年連続で第3位の輸出先となった。

図7 牛肉の輸出量と相手国



資料:USDA/ERS「Livestock and Meat Trade Data」

③ 肉牛・牛肉の価格動向

ア 肥育素牛価格

肥育素牛価格（オクラホマシティー、600～650 ポンド）は、2010年平均では、100ポンド当たり115.4ドルと前年を13.2%上回った。

イ 肥育牛価格

2010年の肥育主要7州（アリゾナ、カリフォルニア、コロラド、アイオワ、カンザス、ネブラスカ、テキサス）における肥育素牛導入頭数は、前年比5.2%増の2035万頭、また、肥育牛出荷頭数は前年比2.2%増の1928万頭となった。

チョイス級肥育牛価格（ネブラスカ、1,100～1,300ポンド、去勢牛）は、2010年平均で100ポンド当たり95.0ドルとなり、前年に比べて14.9%増と大きく下落した。これは、米国内の需要は減少傾向で推移していたものの、輸出需要が前年に比べ大幅に増加したことなどが要因と考えられる。

ウ 牛肉卸売価格

2010年の卸売価格（チョイス級、600～900ポンド、カットアウトバリュー）は、前年比11.4%高の100ポンド当たり156.9ドルとなった。

エ 牛肉小売価格

2010年の平均牛肉小売価格（チョイス級）は、前年比3.2%高のポンド当たり439.5セントとなった。

表8 肉牛、牛肉の価格の推移

（単位：ドル/100ポンド）

区分/年	2006	2007	2008	2009	2010
肥育素牛	117.7	115.4	107.6	101.9	115.4
肥育牛	85.4	91.8	92.3	82.7	95.0
牛肉卸売価格 (カットアウトバリュー)	146.8	149.8	153.2	140.8	156.9
牛肉小売価格 (セント/ポンド)	397	415.8	432.5	426.0	439.5

資料:USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook:Table」

注:カットアウトバリューとは、各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格。枝肉そのものではない。

(3) 養豚・豚肉産業

米国の養豚産業は、アイオワ州やイリノイ州を中心とするコーンベルト地帯において、伝統的に穀物生産や肉牛経営の副業として営まれてきた。一方、ノースカロライナ州やオクラホマ州でのインテグレーションの出現が、養豚産業に対し、生産・流通などの面で大きな変化をもたらしてきた。また、各州において環境規制を強化する動きがみられることから、大規模経営体による環境問題が顕在化している。

95年に40数年ぶりに純輸出国に転じた豚肉輸出は、右肩上がりで推移しており、2008年は前年を下回ったものの、2010年は前年比3.2%増となり、堅調な輸出需要がある。

① 豚の生産動向

ア 養豚経営体数

養豚経営体数は、大規模層を除きおおむね各層で減少傾向で推移しており、2010年は6万9000戸となった。飼養頭数規模別でみると、100頭未満の層が全経営体数の70.9%を占めているものの、飼養頭数では全体

の0.8%を占めるにすぎない。一方、5,000頭以上層は、経営体数全体の4.5%にすぎないが、全飼養頭数の

61.0%を占めており、この割合は上昇傾向にある。

表10 養豚経営体数、飼養頭数の推移

(単位:戸、千頭、頭/戸)

区分/年	2006	2007	2008	2009	2010
養豚経営体数	65,940	75,450	73,150	71,450	69,100
繁殖雌豚頭数	62,490	68,177	67,148	64,887	64,925
1戸当たり飼養頭数	948	904	918	908	940

資料:USDA「Farms, Land in Farms, and Livestock Operations」、「Agricultural Statistics」Quarterly Hogs and Pigs」

注1:養豚経営体数は、2007年以降と2006年以前では集計方法が異なる

注2:飼養頭数は、各年の12月1日現在のもの

イ 飼養頭数

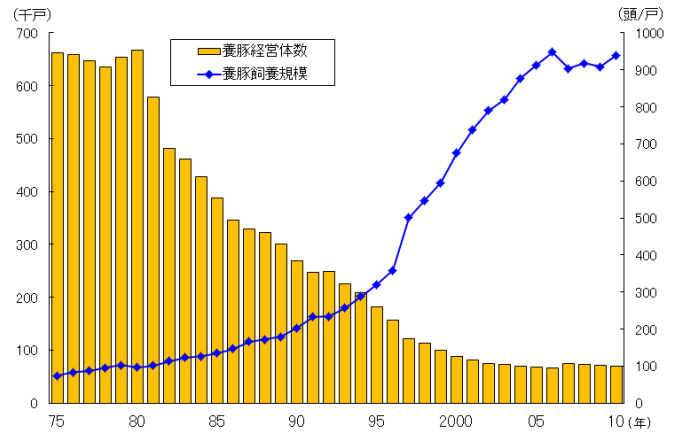
豚飼養頭数は、2003年以降は増加傾向で推移していたが、2007年をピークに減少し、2010年(12月1日現在)では、前年比0.1%増の6493万頭となった。飼養頭数の内訳を見ると、繁殖用豚は前年比1.2%減の577万8000頭に、また、肥育豚は前年比0.2%増の5915万頭となった。

2010年(2009年12月~2010年11月)の子豚生産頭数は、一腹当たり産子数が前年比1.7%増の9.78頭となったものの、繁殖母豚が前年比2.3%減となったことから、1億1369万頭と前年より0.7%減少した。



肉豚の飼養風景

図8 養豚経営体数および飼養規模の推移



資料:USDA「Farms, Land in Farms, and Livestock Operations」Quarterly Hogs and Pigs」

② 豚肉の需給動向

ア 生産動向

2010年のと畜頭数(コマーシャルベース)は、前年比3.0%減の1億1025万頭となり、豚肉生産量も前年比2.4%減の1018万トンに減少した。

なお、2010年のと畜時平均生体重(連邦政府検査ベース)は、前年比0.7%増の123.8キログラム、また、平均枝肉重量(同)は、前年比0.5%増の92.5キログラムとなった。

表 10 豚肉需給（枝肉換算）の推移

(単位:千トン)

区分/年	2006	2007	2008	2009	2010
生産量	9,559	9,962	10,599	10,432	10,177
輸入量	449	439	377	378	390
輸出量	1,359	1,425	2,117	1,857	1,916
在庫量	224	235	288	238	245
消費量	8,643	8,964	8,806	9,013	8,652
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	22.4	23.0	22.4	22.8	21.7

資料:USDA「Livestock, Dairy and Poultry Outlook:Table」

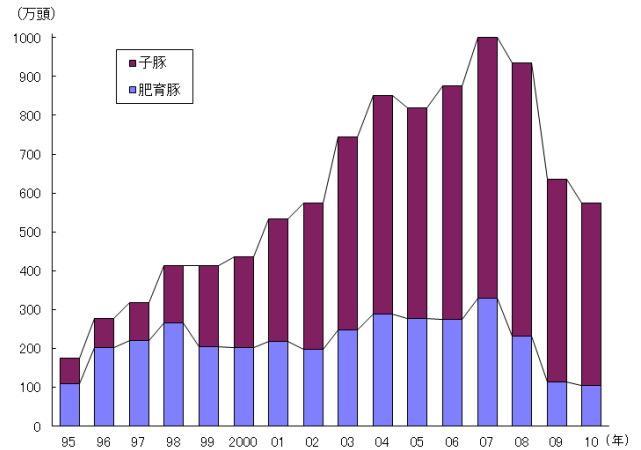
注:1人当たり消費量は小売重量ベース

イ 輸出入動向

豚肉の輸入量（枝肉重量ベース）は、2004年以降は減少傾向で推移してきたが、2008年に減少が止まり、2010年は前年比3.1%増の39万トンとやや増加した。国別に見ると、カナダが31万5000トン（総輸入量に占める割合は80.7%）、デンマークが3万6000トン（同9.2%）となった。

また、生体豚の輸入は、ほぼ100%がカナダからのものである。同国からの輸入頭数は、同国の飼養頭数の減少や2008年9月末から実施された食肉の原産地表示(COOL)の強化などの影響が響き、2010年は、大幅に減少した前年をかなりの程度下回る9.7%減の574万8000頭となった。

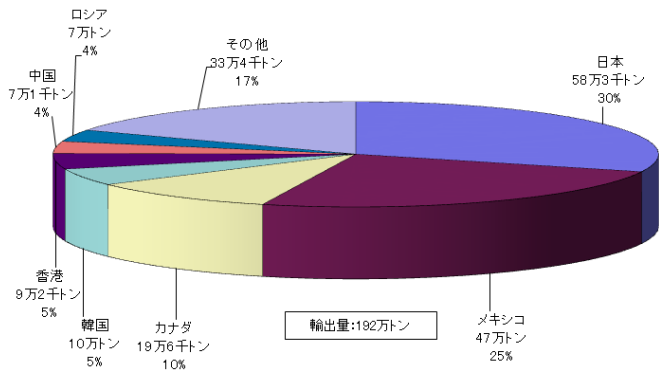
図 9 カナダからの生体豚輸入頭数の推移



資料:USDA/ERS「Livestock and Meat Trade Data」

一方、輸出量（枝肉重量ベース）は91年以降、前年を上回って推移したものの、2009年は世界的な景気の後退による需要の減退や、新型インフルエンザ(H1N1)発生に伴う各国の輸入禁止措置により一時的に輸出量は減少した。しかしながら、2010年は輸出再開により輸出需要が回復したことから、前年比3.2%増の191万6000トンとなった。国別にみると、最大の輸出先であり、全輸出量の30%を占める日本向けが同0.9%増の58万3000トン、第2位のメキシコ向けは、同国の景気回復が遅れる中、価格帯の安い豚肉向け需要が増えたことにより同16.5%増の47万トン、また、カナダ向けは、同6.4%増の19万6000トンとなった。一方、ロシア向けは2010年春まで抗生物質の残留問題により輸出が停止されたことから、同45.9%と大幅に落ち込んだ。

図10 豚肉の輸出相手国（2010年）



資料:USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook」

ウ 消費動向

1人当たり年間豚肉消費量（小売重量ベース）は、ほぼ横ばいで推移していたが、2010年は、前年比4.8%減の21.7キログラムとやや減少し、22キロ台を下回った。

③ 肥育豚・豚肉の価格動向

ア 肥育豚価格

肥育豚取引価格は、輸出量が増大したことなどから2003年に上昇に転じたが、2005年以降は生産量の増加などにより低下傾向となり、2009年には世界的な景気の後退や新型インフルエンザなどによる内需・外需の減退により、前年からかなり大きく落ち込んだ。しかしながら、2010年は生産量の減少に加え輸出需要が高まったことから、価格が大幅に上昇し、前年比33.5%高の55.1ドルとなった。

表11 肥育豚、豚肉の価格の推移

(単位:ドル/100ポンド)

区分	2006	2007	2008	2009	2010
肥育豚	47.3	47.1	47.8	41.2	55.1
豚肉卸売価格 (カットアウトバリュー)	67.6	67.5	69.2	58.1	81.3
豚肉小売価格 (セント/ポンド)	280.7	287.0	293.7	292.0	311.4

資料:USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook:Table」

注1:肥育豚価格は、全米の平均価格。

注2:カットアウトバリューとは、各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格。枝肉そのものではない。

イ 豚肉価格

- ・ 部分肉卸売価格

2010年の部分肉卸売価格（カットアウトバリュー）は、前年比39.9%高の100ポンド当たり81.3ドルとなった。

- ・ 豚肉小売価格

2010年の平均豚肉小売価格は、前年比6.6%高の1ポンド当たり311.4セントとなった。

(4) 養鶏・鶏肉産業

米国の養鶏産業は、飼料穀物の大生産国という利点を生かし、生産から流通までの一貫したインテグレーションの進展により、極めて効率的な生産が行われている。また、国内では、消費者の健康志向からむね肉を中心として消費を大きく伸ばすと同時に、不需求部位のもも肉を中心として鶏肉生産量の2割弱を輸出している。

① ブロイラーのふ化羽数の動向

2010年のブロイラーふ化羽数は、ブロイラー価格（生体1ポンド当たりの生産者販売価格）が前年を上回って推移したことなどから、前年比1.7%増の92億3000万羽となった。

② 鶏肉の需給動向

ア 生産動向

2010年のブロイラー生産量は、ブロイラーふ化羽数の増加により、前年比3.9%増の1656万トンとなった。1羽当たり平均重量（生体ベース）は、骨なしむね肉の需要増に伴うブロイラーの大型化を背景に近年増加傾向にあり、2010年は前年比2.0%増の2.59キログラムとなった。

表13 ブロイラー需給（可食処理ベース）の推移

(単位:千トン)

区分/年	2006	2007	2008	2009	2010
生産量	15,930	16,226	16,561	15,935	16,563
輸入量	27	36	43	45	48
輸出量	2,361	2,678	3,157	3,093	3,068
在庫量	332	326	338	279	351
消費量	13,676	13,590	13,435	12,946	13,472
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	39.3	38.7	37.9	36.2	37.4

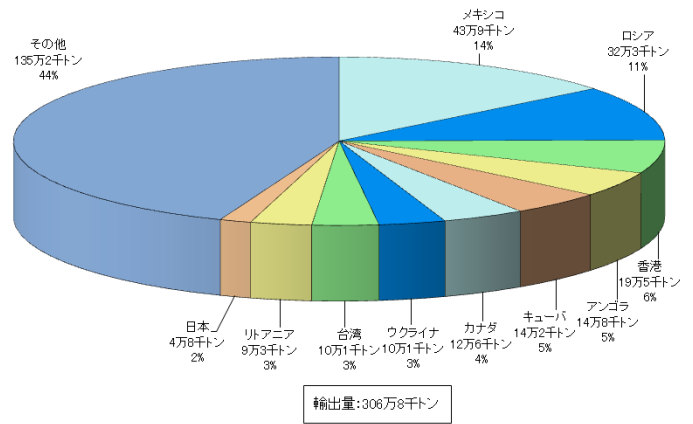
資料:USDA「Livestock, Dairy and Poultry Outlook:Table」

注:1人当たり消費量は小売重量ベース

イ 輸出動向

ブロイラーの輸出量は、2005年以降増加傾向で推移していたが、2009年、2010年と2年連続で減少し、2010年は前年比0.8%減の307万トンとなった。輸出先上位3カ国を見ると、メキシコ向けは前年比18.7%増、ロシア向けは関税割当量の減少などにより同55.7%減、香港向けは同147.6%増となった。

図11 鶏肉の輸出相手国（2010年）



資料:USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Situation and Outlook」

ウ 消費動向

1人当たりの年間鶏肉消費量（小売重量ベース）は、健康志向の高まりや加工度の高いアイテムの増加などから順調な伸びを示しており、2010年は前年比3.2%増の37.4キログラムとなった。

③ ブロイラーの価格動向

ア ブロイラー価格

2010年のブロイラー価格は、前年比8.8%高のポンド当たり49.3セントとなった。

イ 鶏肉価格

・ 卸売価格

2010年のブロイラーの丸どり卸売価格（中抜き、12都市平均）は、前年比6.9%高の1ポンド当たり82.9セントとなった。なお、国内向けが主体となっているむね肉がポンド当たり145.4セント（前年比11.6%高）であるのに対し、輸出向けが主体のもも肉は同51.3セント（同6.6%安）と、日本とは異なり、むね肉はもも肉の3倍近くの高値となっている。

・ 小売価格

ブロイラーの丸どり小売価格（中抜き）は、前年比1.2%安の1ポンド当たり126.3セントとなった。

表13 ブロイラー、鶏肉価格の推移

(単位:セント/ポンド)

区分	2006	2007	2008	2009	2010
生産者販売価格 (生体)	36.1	43.9	46.6	45.3	49.3
卸売価格 (丸どり)	64.3	76.4	79.7	77.6	82.9
丸どり小売価格	104.9	111.5	120.7	127.8	126.3

資料:USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook:Table」

表14 トウモロコシ需給の推移

(単位:百万トン)

区分/年度	05/06	06/07	07/08	08/09	09/10
生産量	282	268	331	307	333
国内消費量	232	231	262	259	282
うち飼料向け	156	142	149	132	130
輸出量	54	54	62	47	50
期末在庫量	50	33	41	42	43

資料:USDA「Feed Grain Database: Yearbook Tables」

(5) 飼料穀物

米国は、世界最大の飼料穀物の生産・輸出国である。飼料穀物の主力であるトウモロコシは、世界の生産量の約4割、輸出量はその約5割を占めていることなどから、世界の需給動向に与える影響力は極めて大きなものとなっている。

① 穀物の生産動向

2010/11年度(9月~翌8月)のトウモロコシ(サイレージ用を除く)の生産量は、前年度比4.9%減の124億4687万ブッシェル(3億162万トン)と前年を下回った。これは、収穫面積が前年を2.5%上回った(8145万エーカー(3258万ヘクタール))ものの、1エーカー(約0.4ヘクタール)当たりの単収が、同7.2%減の152.8ブッシェル(1ヘクタール当たり9.7トン)と前年を下回ったためである。

2010/11年度末在庫は、前年度比34%減の11億2756万ブッシェル(2864万トン)となった。



トウモロコシの収穫風景

② 穀物の輸出動向

2010/11年度のトウモロコシの輸出量は、前年度比7.4%増の4658万トンとなった。このうち、最大の輸出先国である日本向けは、前年度比7.4%減の1401万4000トンと、輸出量全体の30.1%を占めており、次点のメキシコ向けは同9.3%減の748万4000トンとなっている。

③ 穀物の価格動向

2010/11年度のトウモロコシの生産者販売価格は、燃料用エタノール原料向け需要が引き続き増加した一方、飼料および輸出向け需要は前年を下回り、前年度比163セント高の1ブッシェル当たり5.18ドルとなった。

表15 トウモロコシ価格の推移

(単位:ドル/ブッシェル)

区分/年度	05/06	06/07	07/08	08/09	09/10
生産者販売価格	2.00	3.04	4.20	4.06	3.55

資料:USDA「Agricultural Prices」